

令和元年6月17日現在

機関番号：34305

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04324

研究課題名(和文) 保育者養成におけるコミュニケーション能力を育成するための造形教材の開発

研究課題名(英文) Development of Teaching Materials Using the Formative Arts for Fostering Communication Skills in Child Carer Training

研究代表者

矢野 真 (YANO, Makoto)

京都女子大学・発達教育学部・教授

研究者番号：00369472

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、実際の保育者養成における「保育者の専門性」に必要となるコミュニケーション能力の育成について、保育者養成校と保育現場や地域との連携による実践的な活動を中心に、コミュニケーション能力を育むための造形教材の開発を提案した。実践活動として造形ワークショップ等を中心に行った結果、木育のもつリラクゼーションの特性が保育者や子どものコミュニケーション・スキルの向上につながる可能性が示唆され、保育者や子ども、大人とのコミュニケーション・スキルの向上や、ワークショップを企画・準備した学生同士のコミュニケーション自体も促す結果となった。また、これら実践については、造形教材報告集として公開を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究における研究結果は、これからの保育者養成校で学ぶ学生や現職者の再教育(リカレント)への教育的資源として活用されることや、今後の新たな造形教材への応用としての可能性が考えられ、幼児と保育者、地域住民、行政といった子育て支援に対する活動との関連としての研究に広がりうると考える。結果、造形への理解を通してどのように子どもとその取り巻く環境に働きかければいいのかという、教育・保育現場からの要求に答えられる研究として意義がある。

研究成果の概要(英文)：Concerning the fostering of communication skills required for “the specialty of nursery teachers” in practical child carer training, this study group proposed development of teaching materials using the formative arts to enhance communication skills, and held fifty-five workshops mainly through cooperation between universities offering a nursery teachers’ training course, nursery schools, and local communities. As a result, it is suggested that mokuiku’s relaxation feature has a potential to enhance communication skills of child carers and children, and we have compiled a collection of reports on the workshops. It also helped improve the skills required for effective communication between child carers, children, and adults, and communication among those students who planned and prepared for the workshops.

研究分野：幼児教育・保育

キーワード：木育による造形教材 コミュニケーション 保育者養成 実践教材 造形ワークショップ 地域連携

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年の保育者養成において、より高い「保育者の専門性」が語られることが多い。その専門性の一つに、人と共感し、かかわりを深めるといった「コミュニケーション能力」があげられる。しかし、それらに示されてきたものは、小中高の現場について示されたものが多く、保育現場での具体的な内容にまでには触れられていない。実際には、高い「保育者の専門性」を達成するためには、造形の視点からも上述したようなコミュニケーション能力の育成を提示していくことが喫緊の課題であると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、保育者養成校と保育現場、地域、そして造形作家との連携による、以下の目的と内容を含む実践を中心とした研究である。実際の保育者養成における「保育者の専門性」に必要となるコミュニケーション能力の育成について、保育者養成校と保育現場や地域、造形作家との連携による実践的な活動を中心に、コミュニケーション能力を育むための造形教材の開発を提案する。この提案により、保育者養成校の学生を対象とした講義や演習へのフィードバック、そして現職者の再教育(リカレント)など、教育・保育を中心に踏まえながら、広く社会還元していくことを目的とする。

3. 研究の方法

実際の保育現場において応用のきく保育者を養成するために、コミュニケーション能力を育成し、子どもの創造性を育むための「保育者の専門性」を確実なものとするための、保育者養成校と保育現場、地域、そして造形作家との連携を行い、具体的な内容の提唱による造形理解と、実践を教材としてまとめる。そこで、地域の保育所・幼稚園や児童館、造形作家との連携によるワークショップの提案など通して造形教材の現状を調査し、造形教材の現状における問題点の抽出と検討を行う。問題点の抽出と検討にもとづき、地域の保育現場や造形作家との連携を通じたワークショップなどの提案を行いながら、「保育者の専門性」としての具体的なコミュニケーション能力にかかわる造形の具体的な検討と試行を行う。これまでの内容を一般公開するための期間と位置づけ、コミュニケーション能力を育成するための具体的な造形教材集作成によるまとめによる公開を行う。それらを通して造形教材を通じた「保育者の専門性」についての可能性を示しながら、保育者養成校の学生を対象とした講義や演習へのフィードバック、さらには現職者の再教育(リカレント)など、社会還元を行う。

4. 研究成果

(1) 保育者を対象とした、木育を中心とした特徴ある造形教材を用いたワークショップの実践とその効果

まず保育現場における造形教材の文献資料収集について、協力要請する保育所・幼稚園を中心に現状調査(造形教材の捉え方とその実践活動)を行った。同時に、複数の幼稚園との連携を取りながら、子どもたちに向けたコミュニケーションをテーマとした造形教材についてのワークショップを企画・提案し、実践を行った。

保育者を中心に、保育所・幼稚園等において木育を中心とした特徴ある造形教材を用いたワークショップによる実践を行い、その効果を測定するためにアンケート調査を行った。

アンケート調査はワークショップに参加した114名の保育者を対象とした。調査項目として、木育の教材に関わった感想に関して、リラクゼーション効果を測定する尺度であるアラウザルチェックリスト(畑山他, 1994)を実施した。この尺度は、活動性や活発さを示す全般的活性(GA)、退屈さを示す脱活性-睡眠(DS)、不安や緊張を示す高活性(HA)、リラクゼーション効果を示す全般的脱活性(GD)の4因子からなる(表1, 2)。各項目について、「非常に感じた(4)~まったく感じなかった(1)」の4件法で回答を求め、得点化した。「木育」を活用した造形活動のイメージについて、表3に示す項目を用いて質問し、それぞれについて「はい(5)~いいえ(1)」の5件法で回答を求め、得点化した。因子分析の結果、コミュニケーション・スキルを促す教材としての木育の効果([コミュニケーション])、木育を保育に取り入れることに対する興味や動機づけの高まり([動機づけ])の2因子にまとめられた(表3)。

分析の結果、本研究で取り上げた木育によるワークショップは、参加者である保育者の多くが興味を持ち、保育に役立つと考えるようになり、コミュニケーション能力を高める教材として、保育における効果が実感できるものとなったと考えられる。また、保育者は木育の教材に対して一定のリラクゼーション効果を感じていたことから、木育のもつリラクゼーションの特性が保育者や子どものコミュニケーション・スキルの向上につながる可能性が示唆された。

表1 アラウザルチェックリストの項目

- ・ 一般的活性(GA) : 活動的な / 活気のある / 活発な / 積極的な / 精力的な
- ・ 脱活性-睡眠(DS) : だるい / 眠い / ぼんやりした / うとうとした / だらだらした
- ・ 高活性(HA) : いらいらした / ときどきした / 緊張した / そわそわした / びくびくした
- ・ 全般性脱活性(GD) : のんびりした / ゆったりした / のどかな / 落ち着いた / くつろいだ

表2. アラウザルチェックリストの尺度得点の平均値(M)と標準偏差(SD)

	一般的活性(GA)	脱活性-睡眠(DS)	高活性(HA)	全般性脱活性(GD)
M	2.73	1.39	1.26	3.07
SD	(0.59)	(0.50)	(0.28)	(0.68)

表3. 「木育」を活用した造形活動のイメージの質問項目

- 因子1:[コミュニケーション] コミュニケーション・スキルを促す教材としての木育の効果
- ・ 「木育」は、子どもとのコミュニケーションを取ることに役立つと感じましたか
 - ・ 「木育」は、コミュニケーション・スキルの向上に役立つと思いますか
 - ・ 「木育」は、保育者の技能向上や創造性の発展につながると感じましたか
 - ・ 「木育」は、子どもの創造性を発展させることにつながると感じましたか
- 因子2:[動機づけ] 木育を保育に取り入れることに対する興味や動機づけの高まり
- ・ 今後、「木育」を保育現場に取り入れてみたいと思いますか
 - ・ 「木育」を活用した造形活動について、もっと知りたい、参加したいと思いましたか
 - ・ 「木育」を活用した作品づくりは、今後の保育現場で役に立つと思いますか

(2) 保育者養成課程の大学生を対象とした、個人制作による木育を用いた造形教材の実践とその効果

上記(1)の調査結果から、木育のもつリラクゼーションの特性が保育者や子どものコミュニケーション・スキルの向上につながる可能性が示唆されたことを踏まえ、大学の保育者養成課程において、コミュニケーション能力の育成を目的とした木育を中心とした造形教材作成の実践を行った。

実践の効果を測定するため、上記(1)と同様の調査を実践に参加した保育者志望学生 106 名に対して実施した。その結果、まず「木育」の教材に関わった感想(リラクゼーション効果)について、木育による教材は、活動の活性化、活発さを促す効果が得られ、退屈さや不安、緊張を低減させた。

次に、「木育」を活用した造形活動のイメージについて、実践後には多くの学生が興味を持ち、保育に役立つと考えていた。また、[コミュニケーション]の向上がみられた者の自由記述においては、作品のイメージや保育へ導入する効果などに肯定的な意見が多くみられた。しかし、造形の内容や安全、配慮の面など、学生は保育者よりも木育を保育に導入することに難しさを感じていること、またコミュニケーション・スキルの向上に役立つかという質問に対して、どちらともいえないという回答が多く、また自由記述において保育へ導入することの難しさについて述べられた意見もあった。

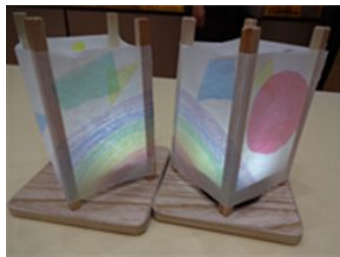
(3) 保育者養成課程の大学生を対象とした、グループ制作による木育を用いた造形教材の実践とその効果

木育の教材におけるコミュニケーション・スキルの向上の効果に注目し、大学の保育者養成課程において、木育によるグループ制作の実践を行った。実践の効果を測定するため、上記(1)(2)と同様の調査を実践に参加した保育者志望学生 112 名に対して実施した。その結果、(2)における個人制作の実践と比較すると、

まず、「木育」の教材に関わった感想(リラクゼーション効果)については顕著な差異は見られなかった。「木育」を活用した造形活動のイメージについては、[コミュニケーション]において共同制作の方が高い傾向にあり、個人制作の場合に比べ、受講生同士のコミュニケーションが活発になることが考えられる。また、自由記述においては共同制作により、個人活動とは違った学びや気づきがあったことや、それは学生同士の活動だけでなく保育における共同制作についての気づきにもつながっていることが窺われた。また、共同制作においてコミュニケーションが重要であるという意見とともに、それに難しさを感じていることが窺われる記述もあり、そのような学生をどう支援しコミュニケーションのスキルを伸ばすかということが課題であると考えられる。

(4) 造形教材報告集の作成とまとめ

研究1年目より継続して行ってきた複数の幼稚園・保育園、及び地域との連携を通じて、子どもや大人といった幅広い年齢層とのコミュニケーションをテーマとした造形教材についてのワークショップを企画・提案し、実践（研究1年目：計17回、2年目：計14回、3年目：計12回、4年目：計12回）を行った。それらを含めた4年間の実践について、木育のもつリラクゼーションの特性が保育者や子どものコミュニケーション・スキルの向上につながる可能性が示唆された調査結果を踏まえながら、コミュニケーション能力の育成を目的とする造形教材について、造形ワークショップとして4年間で実践した計55回のデータベース化したものから、さらに木育をテーマとした実践から厳選し、計18回の実践について報告集冊子『ワクワク工作・木育キャラバン造形ワークショップ活動報告集』としてまとめ、公開した。実際に本実践活動を通して体験した学生が、保育者や子ども、大人とのコミュニケーション・スキルを向上させただけでなく、ワークショップを企画・準備した学生同士のコミュニケーション自体も促す結果についてわかる報告書となり、コミュニケーション能力を育成するための具体的な造形教材報告集作成のまとめとなった。



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

矢野真・田瓜宏二, 保育者養成におけるコミュニケーション能力を育成するための造形教材の開発 -学生の“木育”によるグループ制作を通して-, 京都女子大学紀要, 査読無, 第15号, 2019, 131-138

矢野真・田瓜宏二, 保育者養成におけるコミュニケーション能力を育成するための造形教材の開発 -学生の“木育”による実践活動を通して-, 京都女子大学紀要, 査読無, 第14号(1), 2018, 135-141

矢野真・田瓜宏二, 保育者養成におけるコミュニケーション能力を育成するための造形教材の開発 -現職保育者の“木育”による実践活動を通して-, 京都女子大学紀要, 査読無, 第13号, 2017, 63-71

矢野真・田瓜宏二・吉津晶子, 保育者養成におけるコミュニケーションをテーマとした造形活動 -造形活動による幼児と高齢者間の世代間交流に対する支援事例から-, 京都女子大学紀要, 査読無, 第12号, 2016, 155-162

〔学会発表〕(計11件)

矢野真・田瓜宏二, 地域と学生を結ぶ木育をテーマとした造形プロジェクト, 日本世代間交流学会第9回大会, 2018, 武庫川女子大学

手良村昭子・矢野真, 滋賀県における木育と教材開発に関する一考察, 日本保育学会第71回大会, 2018, 宮城学院女子大学

矢野真・田瓜宏二, 保育者養成における木育を取り上げた造形教材の実践, 日本保育学会第71回大会, 2018, 宮城学院女子大学

矢野真, 地域と学生を結ぶ木育をテーマとした造形プロジェクト, 日本世代間交流学会第7回全国大会, 2017, 熊本学園大学

矢野真・田瓜宏二, 保育者養成におけるコミュニケーション能力を育成するための造形教材の開発 -ワクワク工作キャラバンを通じた学生の学びから-, 日本保育学会第70回大会, 2017, 川崎医療福祉大学

矢野真, 田瓜宏二・吉津晶子・溝邊和成, 保育者養成における自然活動との連続性を意識した造形活動, 日本世代間交流学会第7回全国大会, 2016, 東邦大学看護学部

矢野真, 保育者養成におけるコミュニケーション能力を高める木育 -保育者への質問紙調査から-, 第55回大学美術教育学会北海道大会, 2016, 北海道教育大学

矢野真・田瓜宏二, 保育者養成におけるコミュニケーション能力を高める木育 -保育者への質問紙調査から-, 日本保育学会第69回大会, 2016, 東京学芸大学

矢野真・田瓜宏二・吉津晶子, 保育者養成における交流をテーマとした造形活動, 日本世代間交流学会第6回全国大会, 2016, 追手門学院大阪城スクエア

矢野真,保育における感覚やコミュニケーション力を育む木育,第22回美術解剖学会大会,2015,東京藝術大学

矢野真,保育者養成におけるコミュニケーション能力を高める造形教材研究,日本保育学会第68回大会,2015,相山女学園大学

〔図書〕(計6件)

編著:樋口一成・執筆:浅野秀男,矢野真,他,萌文書林,幼児造形の基礎 乳幼児の造形表現と造形教材,2018,265

編著:山野てるひ・岡林典子・水戸部修治・執筆:足立彰,矢野真,他,一藝社,絵本から広がる表現教育のアイデア - 子供の感性を豊かに育むために -, 2018,200

吉津晶子・溝邊和成・矢野真・田爪宏二,学研,多世代交流のヒント,2017,80

編著:辻泰秀・執筆:有田洋子・矢野真・他,建帛社,図画工作・基礎造形 - 美術教育の内容 -, 2016,210

保育の造形研究会:浅野卓司・栗山誠・竹井史・丁子かおる・平野真紀・矢野真・山野てるひ,サクラクレパス出版部,DVDでわかる!乳幼児の造形,2016,112

矢野真・上月智晴・松崎行代,成美堂出版,幼稚園保育所 実例でわかる実習の日誌&指導案作成マニュアル,2016,160

〔その他〕

『ワクワク工作・木育キャラバン造形ワークショップ活動報告集』

木育をテーマとした実践から厳選し,計18回の実践について報告集として冊子にまとめた。矢野真・田爪宏二,オリンピック印刷,2019,53

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名:田爪 宏二

ローマ字氏名: (TAZUME, Hirotsugu)

所属研究機関名:京都教育大学

部局名:教育学部

職名:准教授

研究者番号(8桁):20310865

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。